

主 題：ユダヤ人の過ち4
 聖書箇所：ローマ人への手紙 3章1－8節

私たちはこれまでに、1：18から罪のさばきについて警告するパウロのメッセージを見て来ました。すべての罪人、神に逆らう者たちは人種、民族、性別、年齢に関係なく、神によって確実にさばかれる、それがパウロが警告したことでした。そして、その罪のさばきについて、特に、この2：1から、今日私たちが学ぼうとしている3：1－8において、ユダヤ人に対する教え、ユダヤ人たちの過ちについてパウロは教えを為しているのです。自分たちは神に選ばれ、唯一神に愛されている民族である、ゆえに、さばきは自分たちとは無関係であると、そのように信じていたのがユダヤ人たちでした。パウロはユダヤ人の一員として、また、神の福音を語る者として、罪は必ずさばかれることを彼の同胞たちに論証して行くのです。次に、2：17からはユダヤ人の三つの過ちについてパウロは指摘しています。律法であり、儀式であり、そして、不信仰に対する彼らの問題、彼らの罪を指摘して、ゆえに、あなたたちは救われているからさばきに会わないと思っているけれど、実は、さばきに会うのだとパウロは繰り返しているのです。このような彼らが願わくは悔い改めて救いに与るようにとパウロは願いながらこの教えを展開して行くのです。

すでに見たように、2：17－24では律法についての彼らの過ちを指摘しました。我々はユダヤ人だ、だから、さばきに会わない、我々には律法が与えられている、ゆえに、このような神の祝福が与えられている自分たちがさばきに会うなどあり得ないというのが彼らの主張でした。パウロはその彼らに対して、あなたたちは間違っている、あなたたちは今さばきに向かっているのだと教えたのです。25－29節では割礼に関する彼らの過ちを指摘しました。ユダヤ人たちにとって大切なことは肉体的な割礼を受けているかどうかでした。この儀式が救われるためには必要であると彼らは信じていました。そこで彼らは、そのような肉体的な割礼よりも心の割礼、つまり、神の教えに従って行くことが神に喜ばれ、神に受け入れられることであると教えたのです。パウロが繰り返し教えたことは、外見だけを重視しようとするユダヤ人たちに対して、一番大切なことは心であるということです。

今日、私たちが見たいのは3：1－8で、ユダヤ人たちが過ったこと、特に、みことばに対する不信仰、聖書のおことばに対する不信仰に対して、ゆえに、あなたたちはさばかれるとパウロが教えるところ です。

☆ユダヤ人たちの過ち

3. みことばに対する不信仰 3：1－8

3：1から見て行くとき面白いことに気付きます。パウロはユダヤ人たちの反論を想定しながら話を展開して行きます。この手紙を送ってそれを読んだ人々、ユダヤ人たちが恐らくこのような反論を為すであろうと想定してパウロは話を続けるのです。この反論をもとに、パウロはユダヤ人たちに論駁するのです。それがこの3：1から書かれているのです。三つの反論をパウロは記しています。

◎ユダヤ人たちがなすであろう反論

1) 神の選びに関して 1－2節

一つ目の反論は「ユダヤ人のすぐれたところは、いったい何ですか。」という反論です。1節に「では、ユダヤ人のすぐれたところは、いったい何ですか。割礼にどんな益があるのですか。」と記されています。ユダヤ人たちは神の選びに関して正しく理解していませんでした。神の選びはどのようなものか、そのことが分かっていなかったのです。この1節でユダヤ人たちがする反論は、パウロはおかしい、なぜなら、自分たちは主なる神から律法をいただいている、また、神の命令である割礼を受けている、しかしながら、その私たちが神のことをまったく知らない異邦人たちに勝っていないというのはおかしいということです。しかも自分たちが彼らと同じようにさばきに向かっているというのはおかしい、神はこんなに私たちが祝してくださったのに、異邦人に比べて何も勝っていないというなどおかしい、それが彼らが指摘したことです。そして、パウロはこのように言います。2節「それは、あらゆる点から見て、大いにあります。」と、彼はそのことを否定していません。ユダヤ人は確かに神からすばらしい特権をいただいていると言います。「第一に、」と続きます。これを見ると、私たちは第一があるなら第二がどこかにあるはず、いくつかのリストが上げられていると思いますが、リストは出て来ません。パウロがここで言いたかったことは、この「第一に、」というのには「最もすぐれたもの、最上の特権、至高の特権」という意味です。パウロも知っていたのです。ユダヤ人は神から数々の特権をいただいていた。このローマ書9章4節からもそのような記事が出て来ます。「彼らはイスラエル人です。子とされることも、栄光も、契

約も、律法を与えられることも、礼拝も、約束も彼らのものです。：5 先祖たちも彼らのものです。またキリストも、人としては彼らから出られたのです。」（9：4－5）と。ユダヤ人が神からたくさんの特権をいただいていたことはパウロも知っていました。パウロはその数々の特権の中で最も素晴らしいものを上げたのです。それがこの3：2にある通り「**彼らは神のいろいろなおことばをゆだねられています。**」ということです。「**いろいろなおことば**」と言っています。神のお告げ、神の啓示という意味をもったことばが使われています。ですから、パウロは神が語られ、それを書き記したのも、神ご自身からのメッセージ、ある人はこれは律法であるとそのように限定しますが、よく見ると、これは旧約聖書のある教えというよりも、旧約聖書全体と考えた方がいいはずで、使徒の働き7：38にはこのように記されています。「**また、この人が、シナイ山で彼に語った御使いや私たちの先祖たちとともに、荒野の集会において、生けるみことばを授かり、あなたがたに与えたのです。**」と、それが神からのメッセージだからです。その神のメッセージが委ねられている、委託されている、任されていると言うのです。そのことをパウロはここで言うのです。なぜ、神のおことばである聖書が神が与えてくださった多くの特権の中で最もすぐれたものなのでしょう？皆さん、お分かりでしょう？なぜなら、私たちはこの神のおことばを通して、聖書の教える唯一真の神がどのような神であるかを知ることができるからです。すでに、私たちが見て来ているように、神が造られた自然界は私たちに神の存在を明らかにしてくれます。でも、その方がどのようなお方で、私との関わりはどのようなものか、それを知るためにこの聖書が必要なのです。神は私たちに聖書を与えてくださり、神がどのようなお方か、同時に、私たち自身がどのような者かを明らかにしています。よく「聖書は心の鏡である」と言います。聖書を見るとそこに自分の心が描写されているように思うことがあると言うのです。人と自分をいつも比較する中に生まれ育って来た私たちは、聖書を見ることによって、初めて神の目で自分を見るのが始まるのです。神の目に自分はどのように映っているのか、自分はどのような者なのかを正しく知ろうとするなら、私たちに必要なものはこの聖書です。神は数々のものを私たちのために与えてくださいました。だれよりも私たちの弱さ、罪深さを知っておられる神が私たちにくださったものは聖書であり、そして、イエスを信じた者には聖霊をくださったのです。このように兄弟姉妹が交わり励ますことができる教会をくださっています。よく考えてみると、この聖書は私たちにあってどれ程重要なものなのでしょう？パウロはそのことを知っています。数々の特権が与えられているけれど、その中でもこの聖書のおことば、神のおことばが最も素晴らしい特権であると。この聖書にあって、私たちはどのように生きて行くべきなのか、正しく生きるその生き方とはどのようなものなのか、神の前に永遠に価値ある生き方とはどのようなものか、そのことも知ることができます。パウロは言います。あなたたちには最も素晴らしい特権、神のおことばが与えられていると。

では、何のために神のおことばが与えられているのでしょうか？なぜ、イスラエルの人々にこの聖書のおことばが与えられたのでしょうか？皆さんはその目的をご存じですか？実は、ユダヤ人たちの問題はそこにあったのです。何のために神が聖書のおことばを自分たちにくださったのか、そのことが分かっていたのです。聖書のおことばが与えられたその目的は、人々がその教えを守るためです。聖書のみことばが教える主なる神を信じ、その教えに従って行くためです。モーセが書いた申命記6章を見てください。6：1－2「**これは、あなたがたの神、主が、あなたがたに教えよと命じられた命令——おきてと定め——である。あなたがたが、渡って行って、所有しようとしている地で、行なうためである。：2 それは、あなたの一生の間、あなたも、そしてあなたの子も孫も、あなたの神、主を恐れて、私の命じるすべての主のおきてと命令を守るため、またあなたが長く生きることのできるためである。**」、神がなぜみことばを与えたのか、それは人々がその教えをしっかりと守ることによって神の祝福をいただくためです。もちろん、祝福をいただくためだと言いましたが、神は明らかにみことばに従う者を祝してくださいます。これはどの時代でも同じです。モーセの時代だけでなく、今のこの私たちの時代においても神のおことばに従う者を神は決して見捨てられません。神は祝されます。私たちの信仰生活における祝福のカギは神のおことばに従うかどうかです。神のおことばに従いなさいと神は言われました。なぜでしょう？そのときに祝されるし、同時に、神の栄光が現わされるからです。神のすばらしさが従う者たちを通して世に明らかにされて行くからです。

◎なぜ、みことばを守り行なうことが大切なのか

(1) そのことによって、神が働きをなされ神のすばらしさが現わされるから

申命記4：5－6をごらんください。「**見なさい。私は、私の神、主が私に命じられたとおりに、おきてと定めとをあなたがたに教えた。あなたがたが、はいつて行って、所有しようとしているその地の真中で、そのように行なうためである。：6 これを守り行ないなさい。そうすれば、それは国々の民に、あなたがたの知恵と悟りを示すことになり、これらすべてのおきてを聞く彼らは、「この偉大な国民は、確かに知恵のある、悟りのある民だ。」**と言うであろう。」、イスラエルが神からメッセージをいただきました。神の教えをいただきました。それを彼らが守り行なうときに、彼らを通して人々が祝福を受けるのです。このみことばが私たちに教え

たように、この約束の地にイスラエルが入って行くときに、そこでこの教えられた神のおことばを實踐しなさい、そうすると、周りの人々が「この偉大な国民は、確かに知恵のある、悟りのある民だ。」と言うであろう。」と、つまり、彼らを通して働かれる神のみわざを見るのです。そして、彼ら自身もその神に引かれて来るのです。そのような祝福を彼らも共有できるのです。ですから、イスラエルには大切な使命があったのです。みことば与えられるということは、そのみことばを彼らが行なうという責任があり、彼らがそのみことばを行なうことによって、神のすばらしさが人々に証され、祝福が周りの人々に及んで行くと言うのです。イザヤ43：21にもこのように記されています。「わたしのために造ったこの民はわたしの榮譽を宣べ伝えよう。」と。ですから、イスラエルの人々が神によって選ばれ、イスラエルの人々に神がこのすばらしい最高の特権であるみことばを与えたのは、それを行なうことによって、神のすばらしさが彼らを通して周りのすべての人々に明らかにされて行くためです。

(2) 周りの人々が神の教訓を学ぶため

彼らが罪を犯せば神のさばきがそこにありました。そして、彼らが罪を悔い改めるならそこには赦しがありました。そうして、人々が神というお方を知ることができるのです。

そのような目的をもってイスラエルの人々は神のおことばをいただいたのです。ところが、このユダヤ人たちはその目的から逸脱して、この特権だけを誇る者になってしまったのです。そこに彼らの過ちがあったのです。聖書が明確に教える救い主を信じることなく、かえって、彼に逆らい、また、人々を間違った教えへと導いて行き始めたのです。だからパウロは、あなたたちは確かに神から選ばれた人々であるけれど、それは特権を自慢し、他の人々を見下すことではないと、そのように教えたのです。この点においてあなたがたは有罪であると、それがパウロが最初にこのユダヤ人たちに教えたことです。みことばが与えられた目的、大切な目的があったのです。そうするなら、今の私たちにも同じことが言えるのです。私たちはイスラエル人ではありません。しかし、神のみことばを預かった者として、託された者として、そこには責任があるということを私たちは忘れてはいけません。クリスチャンの信仰生活が変わって来ない原因はここにあるのです。なぜなら、その人はみことばをただ聞くだけだからです。みことばを聞くだけの人は、どれ程聞いても変わりません。みことばを實踐して初めて神のわざがあなたを通して為されるのです。ですから、みことばを見るとき何度もみことばを實踐することが教えられているのです。そこで私たちは考えなければいけません。どうでしょう？あなたが信仰者であるなら神のみことばである聖書を学ぶことを何よりの喜びとしておられますか？聖書を通してあなたの信仰は成長するのです。聖書を通してあなたは変わって行くのです。そのために神が与えてくださった神のおことばである聖書を学ぶことを喜びとしているかどうかです。

同時に、先ほども話した通り、学んだあなたはその学んだことを實踐しておられますか？ただ聞くだけの者になっていませんか？この礼拝堂を出て行くとき、もう今日学んだことも忘れてしまって、あなたのいつも通りの生活が始まりませんか？あなたの信仰の成長が見られないのはそこに原因があります。神が言われているようにしないからです。だから、神が働けないのです。その責任を神に転嫁することはできません。責任は自分にあります。神が言われることは、みことばを聞いた者はみことばに従うという責任が生じるということです。

また、この恵みをいただいている目的を忘れていないかどうかです。神が私たちに恵みを与えてくださった目的は、イスラエルがそうであったように、世の人々への証のためです。先ほどから見て来たように、イスラエルの人々は神の祝福を独り占めして、それで自分たちが喜んでいさえすればいいということではありませんでした。周りの人々に影響をもたらしたのです。私たちも同じです。なぜ、私たちがこの世に生かされているのか、それは世の人々にこのすばらしい神の証を為すためです。ちょうど、イエスが山上の説教の中で言われた通り、「また、あかりをつけて、それを柵の下に置く者はありません。」、光が消えてしまうから、だから「職台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。」と、家を明るくしようとするなら、光を隠すようなことはしません。「職台の上に置きます。」、そうすると部屋全体が明るくなります。クリスチャンであるあなたの責任、務めはそこにあるのです。この神がどれ程すばらしいのか、この神が私たち信じる一人ひとりに提供してくれる救いがどんなにすばらしいのかを、世の人々に明らかにして行くこと、それが責任なのです。クリスチャンである皆さん、あなたは主を恥じていませんか？福音を恥じていませんか？あなたが亡くなったときに、新聞か何かにキリスト教の葬儀をすると記され、そのとき人々が「この人はクリスチャンだったのか？」と、死を迎えるときまであなたがクリスチャンであることが分からないような、そのような生き方はむなしなもの、価値のない生き方です。私たちが救われた目的は、そのようにすばらしい主を隠すことではなく明らかにすることです。そのために私たちは救われ、神はこの私を用いてくださるのです。

ユダヤ人たちの過ち、それは神のおことばが与えられているその目的を彼らは間違っていたことです。彼らは律法をいただいたことだけに満足していました。それを實踐することがなかったのです。何のた

めに選ばれたのか、そのことに関して彼らは過っていたのです。それが先ず一つ目にパウロが言うことです。

2. 神の約束に関して 3-4 節

二つ目の反論はこの3節から出て来ます。彼らの反論は「不真実によって神の真実が無に帰することになるのでしょうか？」というものです。3節「では、いったいどうなのですか。彼らのうちに不真実な者があったら、その不真実によって、神の真実が無に帰することになるのでしょうか。」。彼らの過ちは神の約束に関して間違っていたことです。というのは、ユダヤ人の主張は「神は我々ユダヤ人を祝福すると約束されている。ところが、パウロ、あなたは我々が祝福を受けるどころかのろいを受ける、さばきに会うと言っている。それは矛盾だ」ということです。なぜなら、ユダヤ人たちの愚考に関係なく、神は彼らを祝福しなければならない、そうでなければ、神は真実なお方ではないと言ったのです。なぜなら、神は我々を祝福すると言った、そのように約束しながらある人を約束しないのなら、神は約束を破ったことにならないか、だからパウロ、あなたが言うようにあるユダヤ人が祝福ではなくのろい、さばきを受けるとするのは矛盾だ、神は我々を祝福すると言ったのだからと、これが彼らの反論だったのです。「彼らのうちに不真実な者があったら、その不真実によって、神の真実が無に帰する」と、無効にするという意味です。信じない人々がいて、その人たちに神がさばきを下すのなら、すべての人々を祝福するという約束は破られたことになるのではないか、そうすると、神はうそつきということになる、これが彼らの主張だったのです。そこでパウロはこのように答弁します。4節「絶対にそんなことはありません。たとい、すべての人を偽り者としても、神は真実な方であるとすべきです。」、ここで彼が言うことは、神は不真実な方、つまり、約束を破られるようなお方では絶対にあり得ない、人はうそを言うけれど神はそのような方ではない、神が私たちと同じようにうそを言うのなら、それはもう神ではないと言います。では、なぜこのような反論が出て来たのでしょうか？ローマ11：26をご覧ください。「こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。」とあります。イスラエルはみな救われると言うのです。そうすると、先ほどの疑問が出て来るのです。このように約束されているのではないか、それなのにパウロはみなが救われぬと言う、矛盾しているのではないかと…。

そこで、この11章の教えをよく見ると、今の私たちの時代のことではないことは明らかです。なぜなら、25節の後半を見てください。「…その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、」と書かれています。このみことばを見ると、異邦人のときが完成した後、イスラエルがみな救われるということです。これは今のことではなく先の話です。神はイスラエルに対して計画をもっておられます。確かに、イスラエルの民が神に対して心を閉ざし、救い主を拒み受け入れなかったゆえに、神の祝福は私たち異邦人に及びました。今の時代において、多くの異邦人がイエス・キリストを信じ救いに与っています。イスラエルの人々が救いに与っていないわけではありません。しかし、彼らは非常に頑なで、彼らはこのイエス・キリストこそが約束の救世主であることを認めようとしないのです。確かに、このような時代に私たちは生きています。でも、みことばの約束はこの時代がいつまでも続くことはない、必ず、この異邦人の時代が終わって、神はもう一度イスラエルの人たちに対して働きを始めると、そのときの事です。ですから、聖書を見るとき、確かに、神は特別な働きをなさいます。でも、聖書のどこを見ても、神は特別にこの民族だけを救われるということは記されていません。たとえ、イスラエル民族であろうと、個人的にイエス・キリストを信じる信仰がなければ救いに与ることはありません。イエス・キリストのことが明らかにされていなかった旧約の時代においても、一人ひとりが神を信じるという信仰によって神の前に救いをいただいたのです。そのことはローマ書4章でアブラハムのことからパウロは続けて言います。4：2-3「もしアブラハムが行ないによって義と認められたのなら、彼は誇ることができません。しかし、神の御前では、そうではありません。：3 聖書は何と言っていますか。「それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義と見なされた。」とあります。」、アブラハムがどのようにして救いに至ったのか、神を信じる信仰によって救われたのです。行ないではありませんでした。その後、ダビデのことが出て来ます。4：6「ダビデもまた、行ないとは別の道で神によって義と認められる人の幸いを、こう言っています。」、つまり、ダビデも証言したことは人は行ないによっては救われぬ、神によって救われるのだということです。7-8節「不法を赦され、罪をおおわれた人たちは、幸いである。：8 主が罪を認めない人は幸いである。」、神が罪を赦した人、神によって罪が赦された人は「幸いである。」と言うのです。個人的にこのようなすばらしい祝福に与った人、罪の赦しに与った者たち、この手紙を書いたパウロ自身もそうです。パウロは使徒の働き9章、22章、26章で自分自身の救いの経験を証しています。そのパウロがIテモテ1：15でこのように教えています。「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」、イエスがこの世に来られた目的は罪人を救うためです。パウロはその罪人の中で自分が最も罪深い者だ、「罪人のかしら」だと分かっていたのです。最初に話したように、神のみこ

とばを私たちが学んで行くとき、みことばは私たちに私たち自身を明確に示してくれます。神の目にどのように映っているのかを明らかにしてくれます。そのときに私たちは自分がどれ程罪深く汚れた者であるかに気付くのです。16節「しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださいからです。」、そのような私が神によってあわれみを受けたと言うのです。「彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと」と、つまり、救いはすべてイエス・キリストを信じるという信仰によって与えられる、それ以外の何もないということです。

イエス・キリストがだれであるかを知らなかったアブラハム、ダビデ、彼らも神を信じる信仰によって救われました。イエスがだれであるか、何のためにこの世に来られたお方なのかがはっきりした新約の人々は、そのイエス・キリストを自らの救い主と信じて救われたのです。皆、救いは個人的なものです。どこを見ても、神がある民族だけを特別に救うなどということは記されていません。ある儀式を行なうことによって救われるとも書かれていません。ですから、パウロは教えたのです。ユダヤ人だということを誇っていた人々に、民族は関係ない、割礼という儀式を行なうことを誇っていた彼らに対して、それは人を救わない、信仰だけだということを明らかにしたのです。ですから、このユダヤ人たちが父なる神の祝福を得ようとするなら、教えを知るだけでなく、その教えに従うことが必要だったのです。そのときに私たちはこの主なる方が真実な方であることを確信します。神は約束されたことを必ず成就される、これは多くの信仰者が日々経験していることです。確かに、神は私たちのうちに働き約束を守ってください、ですから、神に従って生きるなら私たちはよりこのお方に対する確信を強めて行きます。いろいろな問題、いろいろな不安があります。先のことを考えると不安を感じることは山ほどあります。テレビをつけても新聞を読んでも世の中は私たちに不安だ不安だと言います。でも、私たちクリスチャンはそのすべてを支配しておられる神を見、神の約束に目を留めるとき、安心、安心と言います。神がすべてを支配し導いてくださる、この約束に私たちは立つことができるから、神は約束されたことを必ず守られる真実なお方だからです。このような神に感謝しなければいけません。

しかし、同時に、この事実はある人たちにとっては恐怖です。なぜなら、罪は必ずさばかれるからです。罪の赦しを受けていないなら、そこにあるのは自分の行なった罪に対する当然の報い、永遠のさばきです。Ⅱテモテ2：11-13でパウロはこのように言いました。「次のことばは信頼すべきことばです。もし私たちが、彼とともに死んだのなら、彼とともに生きるようになる。：12 もし耐え忍んでいるなら、彼とともに治めるようになる。もし彼を否んだなら、彼もまた私たちを否まれる。：13 私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。」、神は言われたことを取り消すようなお方ではない、約束を守れないようなお方ではない、必ず実現される方、だから、罪人は恐れるのです。なぜなら、そのさばきの日が必ず訪れるからです。その神の真実さについて、パウロはローマ3：4でダビデの告白を引用しています。「あなたが、そのみことばによって正しいとされ、さばかれるときには勝利を得られるため。」と書いてあるとおりです。」、これは詩篇51：4のみことばの引用です。このとき、ダビデには何が起こったのか、思い出してください。ダビデはバテシバとの間に姦淫の罪を犯しました。そして、自分の罪を隠すために彼女の夫であるウリヤを殺そうとしたのです。しばらく経ってから預言者ナタンが彼のところにやって来て神からのメッセージを告げました。Ⅱサムエル12章にこのことが記されていますが、ナタンの話を聞いたダビデは、もちろんたとえによって話されたのですが、自分のことだとは分からずに「そんな男はさばかれてしかるべきだ」と言います。ナタンは言います。「あなたのことです」と。そのときに、Ⅱサムエル12：13「私は主に対して罪を犯した。」とダビデは告白していますが、詩篇51篇には今私たちが見てきたことが記されています。51：4「私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。それゆえ、あなたが宣告されるとき、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられます。」、ダビデが言ったことは「神さま、あなたの言われること、あなたの為さることはすべて正しい、反論できない、神さま、あなたは真実な方であり、言われることばに偽りはない」ということです。ダビデはそのことを知っていたのです。パウロはそれを引用することによって、「たとい、すべての人を偽り者としても、神は真実な方であるとすべきです。それは、「あなたが、そのみことばによって正しいとされ、さばかれるときには勝利を得られるため。」と書いてあるとおりです。」と言います。

信仰者の皆さん、私たちがこれからどのように生きて行くのか、神の約束に立ってそれに信頼を置いて生きる信仰者として生きてください。そのときにあなたの心は希望を失うことはありません。私たちの日々は希望を失うような出来事がたくさんあります。自分自身を見て、その罪深さを見るといやになります。希望を失って行きます。しかし、実際に、希望を失うのは神のおことばから目を逸らしているからです。神は私たちに常に希望を与えてくれます。どのような状況にあっても希望をもたらしてくれるのが神です。なぜなら、人間には不可能なことであっても、神にはすべてができるからです。

だから、どのようなことを聞いても、どのようなことを宣言されても私たちは希望をもつのです。神のみこころは最善であり、神のみこころは人間の思いをはるかに越えている、だから、私たちは期待しながら神のみわざを見るのです。それが信仰者です。そのような信仰生活を歩める者へと私たちは生まれ変わっているのです。ですから、私たちが不安に駆られるとき、私たちの心に心配が襲ってくる時、どんなときにも私たちが立たなければいけないのは神のおことばです。みことばが私たちに希望をもたらし、みことばが私たちの心に平安を与えてくれます。

3. 神のさばきに関して

彼らの反論の三つ目は、もし人の不義が神の義を明らかにするとしたら、なぜ、神がさばくのかというものです。5節「**しかし、もし私たちの不義が神の義を明らかにするとしたら、どうなるでしょうか。人間的な言い方をしますが、怒りを下す神は不正なのでしょうか。**」、彼らの過ちは神のさばきに関する過ちでした。彼らはこのように言ったのです。人の不義を通して神の義が明らかにされて行くのであれば、その人間の不義を怒る神はおかしいではないかと。たとえば、人間の罪が赦される、そのとき神の栄光が現われます、神が罪人を救ってくださった、ハレルヤ！神はすばらしいと言います。人間の罪が赦されたとき、私たちは神に感謝します。神はあわれみ深い方だ、神は恵み深い方だと。だから、罪を犯してその罪が赦されるときに神の栄光が現わされるのなら、ある人は言います、神の栄光が現わされるためのその罪を犯している私をさばくというのはおかしいのではないか、なぜなら、この罪も神は用いて神の栄光を現わされるのなら、罪を犯している私をさばくことはおかしいと。そのような曲がりくねった解釈をする人がいるのです。6節でパウロは言います。「**絶対にそんなことはありません。もしそうだとしたら、神はいったいどのように世をさばかれるのでしょうか。**」と、神はそのように不正を容認される方ではないと言います。もし、そのようなお方ならどうして神が罪をさばくことができるかと言います。神は罪を見て喜んでおられないことは明らかです。7-8節を見ると、人々がパウロの教えを誤解していたことを見ることができます。「**でも、私の偽りによって、神の真理がますます明らかにされて神の栄光となるのであれば、なぜ私がお罪人としてさばかれるのでしょうか。：8 「善を現わすために、悪をしようではないか。」**」と**言**ってはいけ**ない**のでしょうか。——**私たちはこの点でそしられるのです。ある人たちは、それが私たちのことばだと言っています、**」、彼らの誤解は「我々が罪を犯すことで神がどのようなお方であるかを明らかにするのであれば、罪を犯し続けて行こう、」、そのような私たちがさばく神はおかしいと言うのです。まさに、これは罪を愛する者たちの口実でしかないのです。このような教えは存在します。無律法主義という教えがそうです。ルターがこのように命名しているのです。というのは、彼の友人であったヨハン・アガリコラという人物は、行ないによる義、救いを恐れる余り、キリスト者の生活の規範である道德律法を守ることに反対したのです。つまり、簡単に言えばこういうことです。私たちは信じることによって救われた、いかなる律法からも自由にされた、だから、自由に生きればいい、救われた恵みに感謝して自由に生きたらいいのだ、どのように生きるのかということ、たとえば人々に強調すると、その行ないによって救われるという誤解を生むから、行ないなどと一切言わないで好きに生きればいいと。こういう教えをルターは無律法主義と呼んだのです。でも、このような教えは存在しています。私の罪の現在も過去もすべて神によって赦された、だから、感謝して好きに生きましようと言います。もちろん、パウロはこのローマ書6章で、そのような教えに対して、聖書が教えること、神の教えは何かを明確にしていますが、人々は自分の罪を正当化しようとするのです。これが罪人の特徴です。自分の罪の責任を自分で取ろうとしないのです。だから、ここで見るように、罪を犯したい私たちは、罪を犯すことに対して何か自分が納得できる理由を考え始めるのです。罪は赦されたのだから、何をしても神は赦してくれるから大丈夫だと。パウロは言います、それは神の前に大きな問題だと。ご覧ください、8節の最後、「**——もちろんこのように論じる者どもは当然罪に定められるのです。**」、必ず、その罪はさばかれると言います。その不従順に対して主なる神はさばかれるのです。

今日、私たちが見てきたことは、ユダヤ人たちの過ちです。彼らは神からすばらしい神のおことばをいただいていた。ところが、そのおことばを正しく理解しないで、自分勝手に理解して自分勝手な生き方を継続していたのです。そこでパウロはゆえにあなたたちはさばかれると言ったのです。すばらしい特権に与っていながら、神のみこころを知り、神がどのようなお方であるか、そのことを知ることができるみことばが与えられ、その教えを聞いていながら、あなたたちはその方に心を閉ざし、その救いを、その特権を台無しにしてしまっていると。しかし、もし、神のおことばを聞き、そのおことばに心を開くなら、その人は神が約束したように生まれ変わります。それだけの力をもっているのが神のことばです。そして、みことばはクリスチャンを成長させて行きます。

島根の浜田市でその市長の話聞いたことがあります。昭和40年代の半ば頃から市長を務めた方ですが、亡くなる前にこのようなことを言ったと言います。「私は月に一回ガラテヤ人への手紙を学びたい(牧師に言いました)、なぜなら、私はいつ死ぬか分からないから。」と、5回の学びを終えてそ

の後、数ヵ月後に肺がんで召天しました。でも、この方は「私は何ものも恐れない、ただ、私は神だけを恐れる。そして、人は信仰だけによって救われるのだ、いのちよりも大切なもの、それは神の真理である。この真理は価値を転換させてくれる。今まで価値あると思っていたものが無価値であることが判明し、無価値だと思っていたものが永遠に価値あるものだと分かる。」と。わずか、数回の学びでしたが、この方はみことばによって生まれ変わり、そして、罪の赦しをいただいてキリストのもとへと召されて行かれたのです。おことばをいただくということ、この神のみことばを学ぶということはすばらしい特権です。でも、皆さん、ユダヤ人と同じ過ちを犯してはいけません。ただ、聞くだけの者であってはならないのです。あなたがそれを神のあわれみによって実践して行こうとするときに、神はあなたのうちに働きます。そのときにあなたは、救われた目的を、生かされている目的を果たす者として、神が用いてくださるのです。この神こそが救い主であり、この神こそが真の神で、この神こそが私たちの希望であり救いであることを世に明らかにするために、私たちに必要なことはみことばを学び、神の助けをいただきながら実践することです。それがみことばにいただいた目的であり、みことばを託された者たちの責任です。そのように生きておられますか？それがあなたの歩みですか？どうぞ、このすばらしいみことばを愛している者として、みことばに従い続けてください。私たちたちのすばらしい神が世に明らかにされるためです。この方しか救い主はいません。この方だけが私たちに必要な神だからです。